階級闘争について

――K氏へのお答え――

一

博識家の対立物はなんだろう、いうまでもなく「物知らず」です。僕はここへ同時性を持たせて「恥しらず」も加えたい。K氏の「知性とは無縁」の対立物はなんだろう勿論、「知性との無比なる有縁」です。かくて知的生活の統一は分解して矛盾せる構成面がありありと現れます。こいつ正しくといっても前述の道徳性＝「恥しらず」を引き算しての話ですがレーニン旦那の弁証法のおさらえです。

そこで賢明な読者はとっくにおわかりだろうが、K氏の「関西学派とは何か」という論文の意味は結局、「物知らず、物知りに与う」となります。処で、この言葉を本気でいえるほど謙譲な人は今どきたぐいまれだし、又それは決して美徳ではないのですから、当然、それは「物知り物知らずに与える書」と化ける手続きが容易におわかりでしょう。K氏があんなにハッキリと「ポーズではない、ぼくが如何に知性と無縁の人間」といえばいうほど益々で

す。

そこで憶病だといわれると勇敢を、気狂いだといわれると正気を、物知らずといわれると物知りぶりたいのが人情の常であり、これが又、ヘーゲル風の弁証法の真の意味でもあるので、僕がこれからゴタゴタと知ったかぶりを示したにしても読者はお許し下さるだろうと思う。このゴタゴタという意味は、これからちょっと、唯物弁証法やその認識論の藪の中へもぐり込まねばならないということですが、そうさせたのはK氏の論文が見かけのアッサリしているに引きかえて、仲々どうして深淵な問題を提起していられるし、このことが又、僕の前述の判断の正しい証拠でもあるのです。

クロが弁証法に鼻も引っかけなかったのが糸を引いて、日本ではアナキストの間で弁証法に好意をよせた人は、聰明な塩氏をのぞいて雨夜の星でした。それが今やK氏をその列に加えることの出来たのはうれしいことです。而し、塩氏が好意をお示しになったのは、あくまで方法として弁証法を我々の方の戦術面に適用されんがためであったように記憶しています。僕も影ながらその落穂をひろう雀でした。

さて方法とするにとどめるという意味は結局ヘーゲルの自動説或はレーニンの対立物の統一の法則が抱え込んでいる目的と方法との同時性を分解して、すでに第一目的相互扶助を持っているアナキズム特有の方法の中へ、その方法だけを切り離して取り入れることを意味していて、相互扶助（目的）を、普通その対立概念とされている生存のための闘争（方法）を

一緒にして、前述の矛盾の原理即ち対立物の統一の法則の中へ押し込むことによって、その綜合即ち無政府共産社会へ入り込むと考えることではなかったのです。

賢明なK氏は既にお分りだろうが、かかる手続きを取ることは、とりもなおさず、唯物弁証法を殺し、目的論的なヘーゲル弁証法を生ま殺しにして引き受けることを意味していたことはいうまでもありません。

このことが如何に正しかったかは、その後、ベルジイエフ、ロスキー、サルトルなどが次ぎ次ぎに立証してくれましたが、これに符節をあわせるように唯物弁証法の骨組みになっているその徹底的な進化論や自動説などが、純正科学の場からは今日完全に捨てさられた揚句、最後に最近の天文学が、この宇宙は比較的若年であり、宇宙の発展過程には発端があったと証明するに至って、唯物弁証法は致命傷をうけたのです。最後の止めを刺されなかったのはレーニンの先見のせいです。巧緻な彼はあらかじめ物の哲学的物質概念と自然科学的な物質概念とを区別していて、しかも意識と社会生活の発展の領域だけには目的論を残しておいたからです。

二、

この最後の生きた証明が、どうしてそんなに唯物弁証法にとって致命的だったのでしょう。

元来、唯物弁証法の三法則の中もっとも重要な対立物の統一の原理は、物を永遠と見、運動（厳密には自動）をその本質と見ることによって、あらゆる論理的非難をはねつけてしまいました。それは最初、運動を与えるものなしに、即ち発端なしに永遠の物質と運動があり、しかも生成はその運動の過程の中で矛盾を契機として（矛盾の契機は少しも示さずに）行われるとします。かくて唯物弁証法は枕を高くして眠り得たのですが、宇宙に発端があり、それが比較的若年であることが証明されて見ると、物質の永遠性は消滅し、その本質である自動は、誰か或は何かから与えられたことになります（その誰か或は何かが、観念論の精神、神、機械的唯物論の粗雑な物の塊でないにしても）さあ！実に大変だ、対立物の統一の法則はフッ飛んでしまうではありませんか。

勿論、フッ飛ばない手続は前からあったのです。それはソ連哲学が存在論を認めればよかったのですが、その成文法の重圧で息もつけず、若し矛盾の契機はなんだとあくまで追求すれば銃殺まぬがれなしの環境ではその哲学的発展などありえないのですからダメのようです。実をいえば、運動の中で矛盾を契機として起る生成は、それ自身では完了せず、何か他の物、例えば湿気とか細菌とかの助けが必要です。これらが矛盾そのものでないのは勿論ですから、若し前述の哲学的態度をとれば、例の天文学がその証明を与えるずっと前から、純粋の生成は矛盾だけを契機としては決して起り得ないことがわかり、最初に運動を与えるものなしに物質とその運動があったという、そのこと自身が、とりもなをさず、生成の発端そのものと

なって、何にも致命傷を享ける必要はなかったのでした。勿論、かくては唯物弁証法は解消するか、解消することによって、この法則が与える哲学的物質概念として、古今に類を絶した深みのある次元を現すことになると思うのですが、この話は別のことですから本題に帰ります。

対立物の統一の内容を説明せずに、いきなり根本問題に入りましたので読者の中には興味を失われた人もあると思いますから、もう一度その内容を説明することから始めます。

実在する世界の運動の本源は世界にある色んな物の内部に含まれている矛盾から来る。その矛盾が媒介となってその物質は分解して質の違った別の物を出現し、又新しい矛盾を含んで永遠に転廻するというのがその公式です。かくて実在の領域から一方では排斥し他方では肯定し合うと、勝手に断定する色んな対立する一対のものを引っぱり出して来て、ゴタゴタと並べ立てます。

即ち生成過程では存在と非存在、生命過程では生と死、物理では磁気の南北、曰く化学では何、力学では何と、かくて社会生活では階級斗争をとり上げます。エンゲルスなどは単なる場所の運動にさえ矛盾を見て、動く物体は一定の時に、ある一点にあると同時に他の点にあるとさえいっています。

凡ての連絡する運動を定点の総計に分解するこの矛盾の原理に対する非難は、哲学的にはとっくの昔に完了しています。矛盾の契機にふれずに並べ立てた対立する一対のものも多く

は無意味です。例えば磁気の南北などは自動の本源どころかせいぜい他動的な物に過ぎません。

三、

いよいよ廻り廻って問題の本筋へ来ましたが、では、社会生活における階級闘争はどうか？（ここで読者に思い出していただきたいのは前述の社会生活の領域では唯物弁証法が目的論を認めていることです）、マルクスのように個人を抽象と見、階級こそ具体的なものとみる立場からは、この矛盾の原理は理論としては妥当のようです。ここでは方法と目的とは一致します。即ち社会生活におけるブルとプロの対立闘争は、限界を超えると、いわゆる、異質的なソ連的階級協和へ綜合されます。（日本のアナキストの中には、この階級協和の中に矛盾があるといって非難する人もいますが、その点弁証論者は揚棄の理論で切り抜けるから豆腐にカスガイです）問題はそんな処にあるのでなく、ソ連的階級協和が、無限に積み上って行くソ連成文法の重圧と、憲法がデッチ上げられる前までは無暗ヤタラな銃殺の恐怖によってのみ成立している点です。従って、目的論的に自動の原理によって必然的に成立したのではないと言うことです。もし、この成文法の重圧と銃殺の恐怖がなかったら、ソ連的階級協和は皆無だといっても過言ではありません。即ち理論としては一応正しそうに見える方法

と目的或は方法と存在との一致は、現実にはあり得べからざる幻想だと言うことです。この失敗は今ぼくが述べたように自動の原理そのものの中にあって、如何なる場所へ持って行っても失敗するものか、それとも個人を具体的なものと見ず、階級のみを具体的なものと見た誤謬の中にあるのでしょうか？

個人こそ具体的なものであり、闘争する階級は個人の自己発意から来た決意の綜合だと見る我々の立場に立つ時、この自動の原理或は対立物の統一の法則はどのように働くか？この点、僕はK氏がその恋人の忠告を拒否されて、モスクワ共産党大学当りからの迎えをも辞さない覚悟で御教示あらんことを希望するものです。

何故ならば僕はこの点に於て漠然たる意見以外に持っていないからです。例えば、階級闘争の意味を拡げてより一般的に生存闘争とし、それを相互扶助と対立せしめんとする時でも、悠久なる歴史の流れの中で生存のため闘争は近代になるに従ってはげしさを加えて来ましたが、せいぜい四千か五千年位いのもので、残りの何十萬年もの間は無意識的ではあるが相互扶助的なことばかりが続いていたように感じられます。従ってしょせん、この二つは僕にとって対立概念とはなり得ないのです。例えば洋々たる大河とその水面の泡、或は一大叙事詩篇と単なる悲劇との間のように、関係概念としてしか受取れないのです。泡や悲劇や生存の闘争は、丁度コテーの香水のように刺戟は強烈ですが、悠然と流れる大河のような相互扶助に比べて、ほんの瞬間の後に消えてしまうあわ雪のようにしか思えないのです。

この点誤解のないように願いたい。生存の闘争を泡だと奴がいったからには階級闘争は「カス」位いにしか思っちあいないんだろうなどと思わないように願います。

僕としては相互扶助があくまで目的であって、その実現のための手段或は媒介として階級闘争を役立たしむる方が良いのではないかと考えているのです。そしてますます階級闘争のはげしさを増大するために、アナキズム本来の方法以外に、弁証法をヘーゲルの線、即ち本質の論理関係ーヘーゲルがゲーテに矛盾の契機は反抗だと語ったーあの生きている方法の線まで引きもどして、闘争の刺戟をより強烈なものにしなければならないのではないかと考えているのです。

現実の社会生活の中で、この闘争と連帯的な相互扶助的なものとが、非常に接近するように見える瞬間があります。大天災地変や戦争やストライキがスゴソウな様相を呈し始めた時がそれのようです。権力的な命令系統が乱れ、財産に頼れず、各人は真の自己発意を持って捨て身に連帯的な行動に移ります。

この事は一見すると闘争と連帯との統一に近いように見えますが、よく考えて見ると、それは人間が生命の危機に出会うとそのたびごとに、生物に固有な最も自己命令的な相互扶助的な本能の覚醒のせいで、たまたま闘争がその契機になったものだと僕は考えているのです。我々が階級闘争を強く主張する根拠は、闘争を通じて革命えの一歩前進と同時に、この闘争を媒介として、各人の精神の奥底に深く眠っている連帯的な感情を呼び醒し、現私有財産制

度が比較的平穏に続く限りは、その平凡で愚まいな日常生活の中では、しょせん、かき立て得られない連帯感から来る深い霊の歓喜を、現実に経験することによって、将来の無政府共産社会えの徹底的な精神的準備をすることだと考えているのです。

我々は階級闘争を通じ一歩前進するだけではなく、二歩づつ前進しなければなりますまい。

又、かかる社会生活に於ける極限状況の中ではなく、平凡な生活面に於て、先行件と後続件との間にある因果関係と、その生起の時間を捨象して、観念的に綜合する傾向ー即ち原因と結果とをゆう即する心性ーレヴェルが「未開人の思惟」で述べているー傾向は、近代でも非常に宗教的感応性の強い人の生活の中では、時々見うけますが、これを一般社会生活に適用して、方法と目的の同時性をそれから引き出すことは無理だと思います。近代理論物理学が物質を消滅し、同時に因果論を否定したことと、この問題との関連性は、まだまだ、我々の文化段階では一緒にすることは不可能です。我々は日常生活に於て、依然として、因果論的に考えなければならないと思います。従って目的と方法との間に厳存する時間を無視することは、しょせん不可能のようです。

最後に、K氏が提唱された「よき意味での党派性」の承認と、「実証的なものをのぞいて(僕はこの実証という言葉の意味をプラグマチズムの意味に解していて、コント的に取り扱わないのです)近代になにが残るか?」という重要な問題の関連性を分析するために、もう一度、レーニンが哲学の党派性を認識論の立場から追及して、観照的態度と実践的態度(僕

の意味からは実証的態度と云ってもさして変りはありません）とを析出して、前者を徹底的に否定し、実践を政治の党派性の中で捕えた古典的なやり方を、僕は再批判しながら、観照的態度がデカルト以来近代になるに従って、如何に我々の生活に重大な影響を与えたかという無数の実例を示し、同時にそれと党派性との関係を、吾々の「栄光の党派性」を強調しながら述べることによって、K氏説に答えるつもりだが、余り長くなったので一と先ずここで打ち切ることにしたい。

註記

『アナキズム十七号』（一九五四年九月一〇日発行）に載った「関西学派とは何か」という匿名の（桔梗大郎）の文章は、小川の「連盟大会での感想」（アナキズム十一号）に対する批判としてかかれていた。

それは例えば『関西学派という言葉がある。何時頃から、また誰がこう呼びはじめたか：これが文章の中に現れたのは、小川正夫氏の大会感想文の一節であった。』という書き出しで、『この地協には、うわさに聞く博識家小川正夫氏のような御仁は一人もいないし、またアカデミックまではいかなくとも、インテリとよばれるだけでも、まさにテンカンをおこしかねないぼくのような粗野な人物もいる。いちべつすれば、ぼくがいかに知性と縁のない人間であるかをたちどころに了解されるであろう』と、はっきり対象を小川氏にむけて、『社会主義者としてのアナキスト、階級斗争説をとるアナキスト、すなわち自由共産主義者』としての立場で、挑発的な言辞がきわめてシスカルにつきつけられていた。

それに対応するものとして、本稿はアナキズム十八号に「K氏へのお答え」の題で投ぜられたものである。